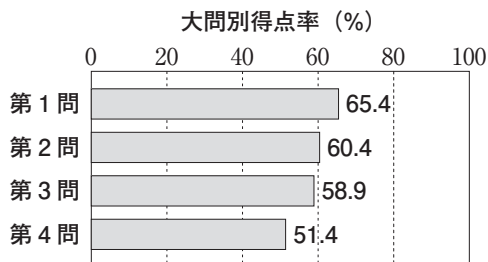
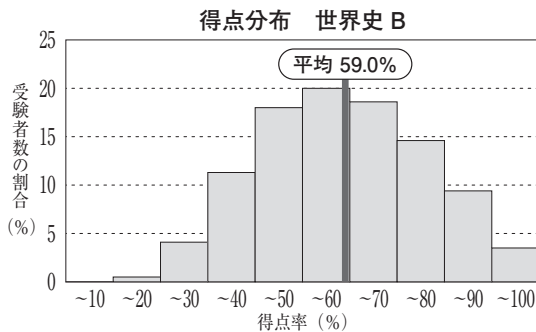


世界史 B

近現代史を正確に覚える学習を着実に進めよう！

I. 全体講評

今回の平均点は 59.0 点で、前回の 53.6 点から順調な伸びを見せた。とりわけ [1] のコロッセウムの正答率が 98.8% と今回の最高を記録したことに見られるように、古代～中世については、ヨーロッパ史、中国史だけでなく全般的に知識が定着してきたと思われる。近世も、もう少しでこの水準に近づきそうである。これに対して、近代は基本的な問題はともかく、ひとひねりされると正解にたどりつかないことが、たびたび見られた。さらに深刻なのは現代史で、基礎が固まっていないようである。これが、端的に表れたのは [34] のグラフの問題である。これは朝鮮戦争が 1950 年～53 年、北爆開始が 1965 年ということさえ知っていれば簡単にできる問題であった。正確な知識があれば、形式を恐れる必要はない。今後の近現代史の伸びを期待したい。



II. 大問別分析

第 1 問 世界史上の文化と娯楽

中国文化史を整理しよう。

第 1 問の得点率は 65.4% と今回で最も高かった。この理由はコロッセウムを答えさせる [1] の正答率が 98.8% であったこと、ササン朝のホスロー 1 世を答えさせる [2] が 78.2%、安史の乱の際のウイグルの役割を答えさせる [4] が 78.1% と高かったことにある。古代史は、これを見る限り一安心である。逆に、近現代史では、禁酒法を答えさせる [9] が 44.3% と大問中最も低かった。戦間期のアメリカ合衆国の一面を示す禁酒法をしっかり押さえよう。また同時期に大量生産・大量消費社会が実現されたこと、移民法で日本を含むアジアの移民を全面的に禁止されたことも留意しておく必要がある。次に得点率が低かったのは、『紅樓夢』を答えさせる [5] で 47.7% であった。同じ中国文化史の [20] と比べて 20% 近く低い。これは明・清の文化史がきちんと整理されていない結果であろう。解説の表「明・清代の文学作品」は最低限覚えておこう。イエニチェリと千人隊について問う [3]、自動車と蒸気機関車について問う [7]、第 1 回万国博覧会の開催時期を答えさせる [8] はいずれも 6 割を超え、この時期としては満足すべき結果である。これに対して中国の国連代表権が移った時期を答えさせる [6] は 56.6% と、上記の問題より易しいにも関わらず、正答率が低い。第二次世界大戦後の東アジア史を、日本との関係を含めて整理する必要がある。

第 2 問 世界史上のマイノリティ

重要な地域と位置を正確に把握しよう。

第 2 問は 60.4% と第 1 問に次ぐ高い得点率であった。この得点率を支えたのは古代～中世の問題である。『ローマ法大全』を答えさせる [11] が正答率 67.3%、ハンザ同盟とフッガー家を答えさせる [12] が 70.5%、後ウマイヤ朝を答えさせる [13] が 77.0% と好調であった。これに対して現代史では、パレスチナのガザ地区の位置と内容を答えさせる [15] は

38.8%と低かった。現代史まで学習が届いていないのではあるまいか。また、歴史的に重要な場所を問う地図問題に、まだ弱いことが気になる。次に正答率が42.5%と低い[14]は、19世紀の文化史であった。『コモンセンス』がアメリカ独立革命を導く書物で、アメリカ独立宣言が1776年に出されたという基本的なことがわかっているれば間違える問題ではなかった。逆にマクドナルドを答えさせる[18]の72.1%という結果は、喜ばしい結果だった。見覚えのある人名だったからであろうか。この段階では難しいと思われた全インド＝ムスリム同盟とジンナーについて問う[17]の59.9%は悪くなく、類題がこれ以前の模試で出題されたことがあったからかと推測される。スレイマン1世を答えさせる[10]の56.0%、マラッカ王国が東南アジアのイスラーム布教の拠点だったことを答えさせる[16]の56.3%は、ともに基本的であることから不満が残る結果であった。

第3問 国家の建設と再編

中南米史をまとめよう。

大問3の得点率は、全体の平均とほぼ同じ58.9%であった。ここでも、昭明太子を答えさせる[20]が正答率65.2%、朱熹を答えさせる[19]が78.5%と古代～中世史が健闘している。郷挙里選、九品中正、科挙の名称を出さず、内容から官吏登用制度を年代整序させる[21]も58.5%と満足できる結果であった。これに対して大問中で正答率が40.8%と最も低かった[24]は、学習が及びにくい近代ラテンアメリカ史であることを考慮すれば、現段階では仕方ないのかもしれない。シモン＝ボリバルを答えさせる[22]の50.7%は、ボリビアの位置がわかっているれば間違える問題ではなかった。メキシコ革命は、倒されるディアスと倒すマデロ・サバタと登場人物が少ない。またラテンアメリカ諸国の独立もシモン＝ボリバル、サン＝マルティン、トウサン＝ルヴェルチュールと人物は多くない。ラテンアメリカ各国の位置も含めて覚えておくことが肝要である。サン＝ステファノ条約を答えさせる[27]はやや難しいが、誤肢が基本的なことから正答率45.1%は満足できるものではない。またオランダ独立を答えさせる[23]の58.5%も近世の基本であることを考えると残念な結果である。青年トルコ人について問う[25]の66.0%、ワッハーブ派を答えさせる[26]の

66.4%は、学習の届きにくい近代西アジア史と考えると健闘したと言える。

第4問 日本と世界のつながり

朝鮮の近現代史をしっかり押さえよう。

第4問の得点率は51.4%と大問中最も低かった。原因は、現代史が5問あったことにある。朝鮮近代史の年代整序問題[35]は正答率30.8%で、全問中最低であった。1884年の甲申政変と金玉均、1894年の甲午農民戦争（東学の乱）と全珠準、1910年の日韓併合と安重根は事件と人物をセットで覚えておく必要がある。39.5%と全問中3番目に正答率が低い[34]は、戦後史とはいえ中学の歴史でも既習済みのはずである。中学内容、特に外交史の復習の必要があろう。これがしっかりとされていたなら、ポーツマス条約について問う[33]で45.7%という数値が出るはずがない。一方、イランの立憲革命について問う[31]は44.0%、第二次世界大戦後の台湾を答えさせる[36]は45.1%であった。学習が届きにくい单元なので、次回に期待したい。血の日曜日事件を答えさせる[32]の68.6%は、近代史としては満足すべき結果であった。イエズス会について問う[30]の71.5%、高麗と洪武帝を答えさせる[29]の56.4%、マカオの名称と位置を答えさせる[28]の55.2%は、近世史も安定してきた結果と考えられる。

Ⅲ. 学習アドバイス

◆ 図版・資料・地図を用いた設問に備えよう。

再来年から始まる新テストの傾向を見ると、従前のセンター試験に比べて資料・図版・地図を使った問題が多い。この傾向はセンター試験にも影響する可能性がある。最低限教科書の図版・資料・地図を見ておく必要がある。